



学校法人
鎌倉女子大学

インターネットによる授業配信に向けて

この度、学校法人鎌倉女子大学と株式会社ジェイ・キャストは、鎌倉女子大学の教授スタッフが提供する授業を、同社が先生方の監修の下に WEB コンテンツとして制作し、その傘下の「J-CAST ニュースサイト (<http://www.j-cast.com/>)」を通じて定期的に配信する事業を行っていくことで合意しました。

この事業を行う目的は、月間アクセス件数7千万件を超える J-CAST ニュースサイトを通じて本学の先生方の授業を不特定多数の閲覧ユーザーに供することによって、広く社会に鎌倉女子大学の教育研究資源を還元し、併せて本学並びに先生方の活動やタレントを紹介しようとするものです。

「ミニッツ・シンキング ー知識のピースを集めよう」という総合タイトルの下に、今秋から掲載される第一期のラインアップは、次の通りです。

市原幸文教授「朝ごはん食べた？ ー今日も元気に時間栄養学のススメ」
廣田昭久教授「ドキドキ・科学捜査 ーウソと心と身体の関係」
白川佳子准教授「ピカソも脱帽！ ー子どもと絵とのすてきなかわり」
木下博勝教授「自分品質改善プロジェクト ーめざせ『もっと快適』」
保坂和彦准教授「わたしに近いあなたへ ー本当のチンパンジーに出会う」
吉田啓子教授「ヨク・ミテ・カッテ ークイズで磨こう食の選択眼」

(掲載順)

第二期以降も、魅力的な WEB コンテンツの掲載が準備されています。

内容は、各担当の先生方が得意とする分野から興味深いテーマを選び出し、これにイラストレーションの衣装を施し、誰にでも解りやすく解説し、閲覧に供しようというものです。閲覧ユーザーは、この WEB コンテンツを画面上で追いかけてながら、ややゲーム感覚で質問に回答しながら自分の認識を振り返ってみたり、立ち止って考えながら新しい知識を修得してみたりと、自然に一定の知的成果を収穫出来る仕組みになっています。こんな学問への接近の仕方も、そろそろあってもいいのではないのでしょうか。

欧米語の「学問」を意味する言葉は、一般に「○○ology (○○学)」といわれるわけですが、これらは皆、ギリシア語を語源としているからで、「psyche (息、魂、心)」を対象とする学問が「psychology (心理学)」、techné (力、技、術)を対象とする学問が「technology (工学)」というように。さて、この「学問」を意味する当の「ロジー」も、同じギリシア語の「legein (拾い集める)」という動詞に由来する言葉で、つまりは学問とは、言葉の成

り立ちからしても、古来さまざまな情報を拾い集めることを発端とする活動ということなのです。そうであるならば、学問へのきっかけも、そう厳めしく構える必要もなく、その手段が「歩き回ろう」と、「聞き回ろう」と、「ページをめくろう」と、今日では「キーボードをたたこう」と、何であれ、まずもっては知識のピースを拾い集めることから始めてみればいいわけではないですか。

1980年代以降、情報革命の時代が到来したとは、随分以前からいわれているわけですが、殊に90年代に入ってから、情報検索のツールは飛躍的に進歩しました。1995年にはYahooが、続いて98年にはGoogleがアメリカのスタンフォード大学の学生達によって立ち上げられ、瞬く間に世界的なインターネットの情報検索サイトとして成長を遂げていったことは、その象徴とっていいでしょう。今日、何らかの事業を展開する機関は、ホームページを整備するのもまた当然のこととなり、誰でもが、何処からでも、関心のある情報に瞬時にアクセス出来るようになりました。それは、不特定多数の人々を一つの情報に結集させるということでもあり、トーマス・フリードマン風にいえば、丸い地球が裏側を失って、同じ情報の下に「フラット化」したということでもありましょう。ですから、それを政治的に利用しようとするれば、アラブ諸国で伝播したジャスミン革命ともなるわけです。

昔から全ての技術というものは、文字通り「両刃の剣」といわれるものですし、いつの時代でも新技術の登場は、懐疑的な目で見られるものですが、私達は、新技術というものに拒否的になる前に、次々に起こる技術革新が時代の趨勢である以上、先ずは肯定的に受け止めてみる必要があるように思います。このインターネットにも思わぬ落とし穴が潜んでいることもあるわけですが、しかしそのことを自覚した上でなお、私は、こう思います。この情報獲得のツールは、しばらくの間は、新聞・テレビといった第一メディアに対して第二メディアの地位に甘んじるのかも知れませんが、実際この第一メディアの權威性は、ツールとしても、カルチャーとしても、崩れつつあり、人々がこの第二メディアに親和性を感じ始めれば、やがてはこれに代わって、今後時代を支配していくこと必定といえましょう。そうであるならば、これを教育にそろそろ試行してみる価値は十分あるように思うのです。

[>前のページへ戻る](#)